

保育者養成課程における「環境を通して行う保育」を 重視した授業の展開 I

－保育実習 I に向けた教科間の連関を通して－

重 成 久 美・篠 永 洋・吉牟田 美代子

The development of teaching, where the influence of environment on education
is seriously considered in training nursery teachers
: through the relations among the subjects in ‘child care practice’

Kumi Shigenari, Hiroshi Shinonaga, Miyoko Yoshimuta

Abstract

In this study we examined how the connection of the child-care workers curriculum, where, in all subjects, these workers acquire knowledge and skills of child care, to the basic principle of child care t.w. “education effected by the environment” is made clear particularly through application - to the teaching content of the four subjects taught before child care practice - of the basic principle mentioned before and the ideas contained in the key-words “humanity and expertise”, “progress”, “constitution of the environment”, “comprehensive games and guidance progammes” together with the current situation of the relations between the subjects.

The result was that “Principle of child care”, “Comprehensive contents of child care”, and “Practice of child care”, satisfied the five key words whereas “Method of figurative expression” did not. As regards the relationship between the subjects, it became clear from the students’ survey that the students were conscious of these relations while studying. Based on these results we carefully studied how the relations between the subjects should be formulated to improve the development of “education effected by the environment”.

Keyword: the training curriculum for nursery teachers, education by environments, connections among subjects

I. はじめに

平成元年、幼稚園教育要領は39年ぶりの改訂により「環境」という言葉が注目され、この考え方は最新の幼稚園教育要領でも継承されている。この要領には、「幼稚園教育の基本」として、幼稚園教育は「環境を通して行うものである」とされており、さらに「幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この

場合において、教師は、幼児と人やものとのかわりが重要であることを踏まえ、物的・空間的環境を構成しなければならない」と示されている¹⁾。一方、保育所保育指針にも「保育の環境には、保育士等や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、更には自然や社会の事象などがある。保育所は、こうした人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものとなるよう」「計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない」と記されている。^{2) 3)}

一般に、教育は、子どものもつ潜在的な可能性に働きかけ、その人格の形成を図る営みであり、それは、同時に、人間の文化の継承であるといわれている。環境を通して行う教育は、乳幼児との生活を大切にされた教育であり、乳幼児が保育者と共に生活する中で、物や人などの様々な環境と出会い、それらとのふさわしい関わり方を身につけていくこと、すなわち、保育者の支えを得ながら文化を獲得し、自己の可能性を開いていくことを大切にされた教育なのである。乳幼児一人一人の潜在的な可能性は、乳幼児が保育者と共にする生活の中で出会う環境によって開かれ、環境との相互作用を通して具現化されていく。それゆえに、乳幼児を取り巻く環境がどのようなものであるかが重要になってくるのである。したがって、環境を通して行う教育は、環境の中に教育的価値を含ませながら、乳幼児が自ら興味や関心をもって環境に取り組み、試行錯誤を経て、環境へのふさわしいかわり方を身につけていくことを意図した教育なのである。

また、乳幼児期は自分の生活を離れて知識や技能を一方的に教えられて身につけていく時期ではなく、生活の中で自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、人間形成の基礎となる心情・意欲や態度などが培われる時期である。また、乳幼児は好奇心が強く、何でも見たがり試したが、面白そうなことがあればすぐに行動するなど、活力の表れる時期ともいわれている。このため、乳幼児期の保育は、こうした特性をいかし、乳幼児が周囲のすべての環境からの刺激を受け止め、自ら興味関心をもって環境にかかわり、さまざまな遊びを展開し、充実感を味わう体験が得られることを重視している。したがって、このような環境を通して行う教育は、乳幼児の主体性と保育者の意図がバランスよく絡み合い、乳幼児が自ら興味関心を持ち、かかわりたくなるような環境が用意されなければならない。

しかしながら保育現場では、保護者などから幼稚園や保育所に対して見かけの教育効果を求める要望が出され、園側もそれに応える保育内容・方法を多くし、技能の習得や知識の獲得への効果的な指導がよい保育として評価される状況があり⁴⁾、養護と教育が一体的に展開される遊びを通した総合的な指導には至らない単線型の保育形態が未だ散見されている。

一方、保育者養成課程においても、環境を通して行う教育について、保育の本質や目的に関する授業で理論を学習し、保育内容を展開するための知識や技能を習得する基礎技能を活用しながら、保育内容の授業でその展開方法を学ぶが、短期間の修業年限の中では、それぞれの授業の位置づけから基礎技能で学んだ内容を環境構成として生かす方法まで関連づけた指導ができず、実習に向けた保育技術の獲得には至っていない。また、学生が就職後、保育現場で成長し続ける保育者として活躍するために、養成校の卒業段階においておさえておきたいことの1つに、理論と実践の往還的關係があげられている⁵⁾。そのため保育実習に主眼をおき、特に保育原理などで学ぶ基礎理論が保育内容総論等の科目に広がり、保育に必要な基礎技能を学び、保育実習等の実践につながると、その学びが多層的になり、全て共通して身につくのではないかと考える。

そこで、本研究では、保育者養成課程における各教科で学ぶ保育の知識や技術が、保育の基本で

ある「環境を通して行う教育」にどのように繋がっているのか、実習の初段階である保育実習 I に至るまでの4教科の授業内容において、「環境を通して行う教育」に関する授業の展開と教科間の連関について検討することを目的とする。

II. 方法

保育者養成課程における必修科目のうち、保育の本質・目的の理解に関する科目である保育原理、保育の内容・方法の理解に関する科目である保育内容総論、基礎技能の科目である造形表現法、保育実習の科目である保育実習 I（保育所）を取り上げ、初段階の実践である保育実習 I で求められる保育士の知識や技術として、下記の特に関連するキーワードを5つ取り上げ、教科間におけるキーワードの連関と授業の展開事例を示す。

<保育実習 I で求められる保育士の知識や技術のキーワード>

①人間性と専門性

本学では、キリスト教精神に基づく豊かな人間性と保育者の専門性をもち、実践を理論化できる力を兼ね備えた保育者の養成を目標としている。キリスト教精神に基づく豊かな人間性は、「やさしいまなざし、やさしい耳、やさしい笑顔、やさしい手」として、また、保育者の専門性は「発達援助、生活援助、環境構成、遊びの展開、関係性の構築、保護者への相談・援助等の知識・技術」としている。

②発達

保育所保育指針第2章に示されている子どもの発達の特性や発達過程を理解し、発達及び生活の連続性に配慮して保育を行う様子を、現場で実際に子どもに触れながらイメージする。

③環境構成

子どもの周囲にある様々な環境がもつ意味を理解し、遊びを通して発達に及ぼす影響を考えながら、子どもが思わずかかわりたくなるような応答性のある環境を構成する。また、子どもの心の動きや活動の流れを見ながら、常に幼児の主体的な活動が展開されるよう再構成を行うことが求められる。

④総合的な遊び

保育は、子どもの生命の保持と情緒の安定を図るために保育士等が行う養護と、「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の5領域から成る子どもの発達を促す教育から構成され、子どもの生活や遊びを通して総合的に展開される。

⑤指導計画

子どもが発達に必要な経験を積み重ねていくことができる環境を計画的に構成し、子どもの心身の状況により適切な援助をする。その際、子どもの発達特性と一人一人の子どもの実態を押さえ計画を作成し、見直しをもって保育する。

Ⅲ. 結果及び考察

1. 各教科におけるキーワードの連関

先に示した4つの教科から、保育実習Ⅰで求められる保育者の知識や技術として、「環境を通して行う教育」に関するキーワードがどのように連関しているかを図1に示す。

この5つのキーワード（人間性と専門性、発達、環境構成、総合的な遊び、指導計画）については、保育原理と保育内容総論、保育実習指導Ⅰで全て網羅されているが、造形表現法では指導計画が見られない。

キーワード	人間性と専門性	発達	環境構成	総合的な遊び	指導計画
各教科との関連					
教科	保育原理	保育内容総論	基礎技能(造形表現)	実習指導Ⅰ	
授業のねらい	・養護と教育が一体的に展開されるねらいを設定し、保育内容を工夫して活動を行う計画の立て方を理解する。	・子どもが主体的に関われるような環境を構成し、関わりを実体験の中から学び取っていく。 ・子どもが遊びを総合的に展開する中で、養護と教育が一体的に行われていることを理解する。	・基本的な造形作業の技法の積み重ねから、その素材を組み合わせることで、遊びの環境を構成する方法を身につける。	・実践実習を踏まえ、子どもとかわりながら保育者の人間性と表現力を身につける。	
内容	・指導案の立案を通して、保育のねらいを達成するための環境構成や配慮・援助の書き方を学ぶ。	・環境構成と遊びを展開する配慮・援助技術を学ぶ。 (子どもを入れての授業展開)	・造形表現法から子どもとの表現活動へ、そして総合的な遊びへの発展というプロセスを理解するために立体的なこいのぼりの制作に取り組む。	・保育実践実習を通して、以下の3点のねらいを学ぶ。 ①遊びの環境を運ぶ、 ②表現の大切さを学ぶ、 ③集団へのかかわりを体験する。	

図1 各教科における「環境を通して行う教育」に関するキーワードの連関

2. 授業の展開事例・考察

(1) 保育原理

保育原理の講義内容の中で、特に環境を通して行う教育の具現化に必要な「保育の計画と実践の原理」について取り上げる。

- 1) ねらい：養護と教育が一体的に展開されるねらいを設定し、工夫して保育を行う計画の立て方を理解する。
- 2) 内容：指導案の立案を通して、保育のねらいを達成するための環境構成や配慮・援助の書き方を学ぶ。

- 3) 方法：保育実習指導 I の授業において、保育現場で実施した保育実践実習の遊びの環境づくりをふり返り、指導計画として明文化する。
- 4) 結果：授業後に実施した学生のふり返りレポートより、指導計画の立案を通した学びを表 1 に示す。

表 1 指導計画の立案を通した学び

<p>1) 養護と教育が一体的に展開されるねらいについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ねらいを考えるときには、それぞれの発達段階での特徴、5 領域を理解していなければならない。また、保育とはどのようなものなのか、保育を行う上で大切なことを知っている必要がある。 ○何事にもねらいが必要だと感じた。この活動は何のためにするのか、これはどのような学びを子どもに与えることができるのかなど、園生活の中で沢山の学べることがあるのだと思った。 ○一日の保育のねらいは、自分が育てたい子どもの姿や園の方針に繋がっているし、そのねらいは 5 領域(教育)や養護面で大切なことを考える必要がある。また、年齢に応じて遊びの内容やねらいは大きく変わり、配慮や援助も保育者の声かけ等を行うことでねらいを達成できるなど、全てねらいに繋がっていると思った。 ○教育は、遊びの中に沢山あり、ただのボール遊びでも友達と一緒に遊ぶ(人間関係)、歌や言葉に合わせる(言葉)、数を数える(環境)、投げ方を工夫する(表現)、体を使って遊ぶ(健康)などが考えられる。よって、指導案で立案した遊びには、常に子どもの最善の利益を求めた養護と教育が必要であると考える。
<p>2) 計画を立てる意義について</p> <ul style="list-style-type: none"> ○子どもが自ら興味を持ち、進んで行うことが遊びだということを念頭におくと、いくら保育者が計画を立てても当然うまくいかないことがある。そこで、指導案を立てる段階で、いかに多くの子どもの様子や姿を予測できるかが重要になってくると感じた。また、活動の導入で、どのように子どもの「やりたい」という気持ちを引き出すかを考えることが大切だと思った。 ○子どもは大人が考えもしない行動をするから、臨機応変に対応できる力と、ねらいをしっかりとつことの両方が大切だと思った。ねらいがしっかりしていなければ活動できないし、子どもの成長につながるための保育者の適切な配慮と援助が必要だと思う。

5) 考察：

保育は、子どもが自ら興味をもって環境に関わる主体性を重視しており、子どものかわりを誘発しうよう、発達に応じた養護と教育を一体的に行うことのできる環境を構成することが重要である。表 1 の学生のレポートからも、計画を立てることによって、改めて子どもの発達の姿を踏まえ養護と教育の観点から子どもの活動の意味を理解し、ねらいを設定する必要性が理解できたようである。また、ねらいを達成するために教育的価値を含めた環境を構成することや、子どもが主体的に関われるような保育者の配慮・援助の方法などの保育の原理を総合的に学べている。さらに、幼児の主体性と保育者の意図のバランスを考慮しながら計画を立てる意義についても理解を深めることができた。

また、計画の立案には、保育のさまざまな基本原理の理解が必要であり、養護と教育の一体的な展開を学ぶ保育内容、子ども理解のための発達心理学や乳児保育、保育の内容につながる基礎技能など、学生自身もそれらの授業の連関を深く実感していた。方法としても、今回は保育実習指導で実施した保育実践実習の体験を基に指導計画の立案を学んだが、同様に保育内容総論においても養護と教育の一体的な展開方法等について学び、連関を図った効果が認められたといえよう。

(2) 基礎技能 (造形表現)

1) ねらい:

- ・造形の基本的な技術を身につける。
- ・制作した作品を再構成し、遊びの環境としての大型遊具の制作を行う流れを体験し理解する。

2) 内容: ②～⑥回目

造形表現法の中で「造形=作品作り」という認識ではなく「造形～子どもの表現活動～あそびへの発展」という流れを体験してもらうために、表2のとおり『こいのぼり』をモチーフとして5コマにわたり平面の制作活動から最終的に遊びの環境へと発展させる大型遊具の制作を実践した。



表2 こいのぼりをモチーフとした大型遊具制作の実践過程

	②	③	④	⑤	⑥
内容	鯉のぼり 2D 平面の鯉のぼりを制作 (材料は自由)	鯉のぼり 3D ストローを支柱とした立体の鯉のぼりを制作 (材料は自由)	マーブリング マーブリングの技法を使って肌絵を制作	スパッターリング スパッターリングの技法を使って肌絵を制作	巨大鯉のぼり 今までに作った平面作品3点 (②④⑤) を利用して段ボールで巨大鯉のぼりを制作

②③⑥にそれぞれアンケートを実施。⑥のアンケート結果から学生の学びを読み取る。

●学生の活動

視点・子どもと作業する際の援助の方法 (保育技術)

- ・共同作業を通して何を経験しているか (集団の教育力)
- ・授業内容のつながり (教科内・教科間の連関)

3) 結果: 授業後に行った学生のふり返りレポートより、造形表現法の学びを表3に示す。

4) 考察:

「複数の造形活動」が一つの大きな「遊びの環境」へと結びつき、その後の片付けも遊びを通して出来るような配慮の方法までを駆け足で体験してきたが、授業後のアンケートの中で「協力」「共感」「達成感」というキーワードが多数見られた。学生たちは共同作業を通して、コミュニケーションの重要性和難しさを感じながらもその先にある「完成」という達成感を感じることが出来ていた。また、大量の造形作品を再構成しながら他人の感性に触れ、認めるという行為を行う中で、子どもと共に造形作業を行う上での様々な配慮・援助につい

表3 造形表現法における学び

- ・作品の再構成ー遊びへの展開の中で共同作業の楽しさを感じ、実際に子どもたちと制作活動を行う上で必要な配慮・援助について考え自己課題を見いだすことが出来たか。
- 子どもたちが安全で楽しく制作できる環境を整え、一緒に作ることを楽しめる言葉がけをしなければならないと思った。
- グループの中でも顔やしっぽやうろこなどいくつかに分かれて作業をすることで、スムーズに完成することが出来た。誰かが良いものを作っていると、「それ良いね」という共感もでき、とても充実した時間だった。
- 段ボールをつなぎ合わせるためにガムテープや接着剤を使わなくてもたこ糸で十分に固定できるうえにすっきり見え、糸をゆるく結べば段ボールの接合部分を曲げることができた。また、片付けをするときに、たこ糸だとすぐに解体でき、片付け作業はガムテープで貼り合わせた場合より確実に時間も短縮できるし、楽だということが身をもって理解できた。
- 自分ひとりで作るのとは違い、自分の意見を言ったり、人の意見を聞いたりとお互いに協力してできた。
- 今までの授業が今回につながっていた。作ってきた作品も作り終わったら終わりではなく何回でも再利用することができることがわかった。

での気づきをアンケートから読み取ることができた。個人制作の時間では得られなかった集団の教育力を強く感じた部分でもある。造形の授業ということでもすれば「作品制作」という部分に重点が置かれがちだが、今回のようにひとつひとつの造形技術を習得するために創られた個人の作品を素材とし、さらに大型遊具などの一部として大胆に再構成してゆくことで、保育内容総論や保育内容（環境）（健康）等の部分と関連させた授業展開を試みている。学生時代に出来る学びの中で、今回行った一連の流れを実践してゆく機会はなかなか無いだろうが、就職後自分の保育を試行錯誤する中で参考にすることができるだろう。また、保育実習における短時間の造形活動に対応するために毎回授業内で「かんたんにつくれてあそべるちいさなうごくおもちゃ」というテーマで発表を行っている。授業内で互いに共有したレシピを実習に持ち出し、役立てることができている。

(3) 保育内容総論

1) ねらい：

- ・子どもが自発的、意欲的に関われるような環境を構成し、子どもの主体的活動や子どもの相互の関わり方を実体験の中から学びとっていく。
- ・子どもが安心安全の中で遊びが展開できるように、養護的な土台をつくる。又、遊びが総合的に展開する中で養護と教育が一体的に行われることを理解する。

2) 内容：「環境構成と遊びを展開する配慮・援助技術を学ぶ」

- ・保育園の子どもといっしょに

(A 保育園の4・5歳児)

子ども：40名、学生：1年生45名

●環境構成・・・4グループに分かれて環境設定

(写真参照)

- ・新聞プール
- ・魚釣り→網焼き→ペンギンにえさやりコーナー
- ・迷路→バスごっこ
- ・らくがきコーナー



●子どもの活動（写真参照）

- 視点：
- ・発達にふさわしい環境構成であるか。（養護と教育を意図して）
 - ・遊びを通して、具体的な配慮・援助ができているか。
 - ・子ども、学生、保育者間の関係性（必要に応じて連携できているか）



3) 結果：授業後に行った学生の振り返りレポートより、環境構成と遊びを展開する配慮・援助技術に関する学びを表4に示す。

4) 考察：

保育にあたっては、一人ひとりの発達のプロセスや発達課題、その日の心身の健康状態に十分な配慮をしながら、子どもが安心して安全に遊ぶことができるような環境を整えるとともに、子ども同士の相互的な関わりへの援助、子どもの主体性や能動性に基づき遊びを誘発し発展しうる環境構成が必要であることを理解している。その中で養護と教育を一体とした保育の特性について理解を深められたと思われる。

次に、子どもの願いに保育者の願いを重ね合わせ、それを保育の意図する作業として指導計画を具現化するという学びにつなげなければならない。保育内容の授業では、養護と教育を一体とした保育の特性を踏まえて「第2章 子どもの発達」を熟知して「第3章 保育の内容」を読み解くとともに保育の目標・保育の方法・保育の環境について徹底し、第4章「保

表4 環境構成と遊びを展開する配慮・援助技術に関する学び

<p>1) 環境に関わって活動する幼児の姿を観察し、養護と教育の一体性を考える。</p> <p>○養護：子ども自身が自分の力で発達体験をしていると思える時は、温かいまなざしで見守っていると必要な時がくれば、子ども自身からアプローチがあり、そこに人的環境としての保育者の役割があるということを学んだ。この人的環境こそ「生命の保持・情緒の安定」を保障するものと確信した。</p> <p>○健康：新聞プールで投げる、もぐる、破るなど思いっきり体を使って遊んでいる。電車ごっこや迷路では、走ったり、くぐったり全身をのびやかに動かして集中してあそんでいる。</p> <p>○人間関係：友達や学生を誘い、新聞(水にみたてて)をかけあったり、いろいろなルールを決めて一緒に遊ぶ楽しさを味わっている。異年齢の友達とも関わり合いながら折り合いをつけて遊んでいる。</p> <p>○環境：学生が設定した環境の中で遊び始めるが、必要に応じてイメージを拡げ、環境を再構成し工夫して遊ぶ。</p> <p>○言葉：自分で感じたことや考えたことを学生に話したり、聞いてみたりする。「これ何に見える」「あっちの〇〇で遊びたいからついてきて」「〇〇がたのしかったよ」等々。魚釣りごっこでは、釣って、焼いて、食べるなどままごと遊びに発展し、言葉が豊かに飛び交っている。</p> <p>○表現：感動したことを言葉にしたり、身体全体で喜びを表現する。らくがきコーナーでは、段ボールの大きな家の真っ白な壁に好きな絵を描いたり、つくったり切ったりしたものを貼って伸び伸びと思いが表現できている。</p>
<p>2) 幼児と遊びを共にしながら、遊びの展開や環境の再構成などに適切な配慮や援助ができたかを振り返り、自己課題を見つける。</p> <p>○子どもたちが興味関心を持つ環境が構成できるためには、感性(イメージ、気づき、創造性等)を磨き子ども自らが動きたくなるような環境のつくり手になりたいと実感した。</p> <p>○子どもの発達に伴って、自己主張、自己発揮をしながら遊びが展開されていくことがわかる。その時に、一人ひとりが環境を自らのものにして仲間と協力しあって環境を構築しながら遊びが展開できるように、適切な配慮・援助が必要だということがわかる。しかし、実際は立ち往生してしまう場合が多い。経験の積み重ねが必要である。</p> <p>○子どもと遊ぶことに重点をおき、周りを見るゆとりがないため安全面の配慮に欠けることに気づいた。今後、視野を広げた関わりができるように学びたい。</p>

育計画及び評価」については、「保育原理」の教科に重ねていけるようにシラバスの連関をとり、授業を展開している。

(4) 保育実習 I

1) ねらい：実践実習を踏まえ、子どもとかかわりながら保育者の人間性と表現力を身につける。

2) 内容：保育実践実習を通して、以下の3点のねらいを学ぶ。

①遊びの環境を運ぶ、②表現の大切さを学ぶ、③集団への関わりを経験する。

3) 結果：授業後に実施した学生のふり返りレポートより、保育実践実習を通じた学生の学びを表5に示す。

4) 考察：

環境については、運動や感覚、イメージなどの発達を考慮した遊び環境の選択（トンネル、バルーン、縄とび、玉入れ等）、環境そのものの大きさや操作性などの難易度の工夫がなされており、子どもの喜ぶ様子から、自らかかわって遊べるものであったといえる。また、もともとの遊び環境が子どものイメージで別の遊びに発展する場面もあり、保育者が子どものイメージを共有し、さらに別の新しいかかわり方を発見できるよう環境の再構成の工夫がなされていたことを学んでいる。また、表現に関しては、初めての出会いに伴う不安軽減や、遊びの世界へ誘う笑顔と動作などのかかわり方から、子どもの気持ちに寄り添ったり、盛り上げたりする際、保育者の表現力が必要であることを実感していた。集団へのかかわりとしては、未満児は個々への対応が多いが、クラス全体を見て小集団をまとめることや、以上児

表5 保育実践実習を通じた学生の学び

<p>1) 運んだ環境への子どものかかわり</p> <p>○トンネル、バルーン、縄跳びの環境を持って行った。トンネルはくぐって遊んでいたが、途中で壊れてそりになり、アンパンマンに変身するためのマントやベルトがドレスやハチマキに変わったりするなど、保育者と子どもの工夫により再構成されていた。</p> <p>○3歳児に玉入れを持っていき、玉入れの箱は、投げた玉が戻ってくる滑り台の原理や、玉の入り口の大きさと難易度を変えるなどの工夫をした。また、箱は子どもに、玉は団子にしたため、人形にお団子を食べさせて遊んでいた。途中で女の子数名がボールでお団子屋さんを始めたので、お団子を買って子どもに食べさせに行くという流れを作った。子どもたちは、喜んでまた入れたいと玉入れに夢中になっていた。</p>
<p>2) 表現の大切さを学ぶ</p> <p>○2歳児では導入時に手遊びをしたが、ポカーンと当惑されたため、笑顔と大きな動きを意識して行った。最後は応答しながら話を聞いてくれたが、子どもの心をつかめるようなやり方や言葉がけを身につけなければならないと感じた。</p> <p>○はじめは緊張と恥ずかしさがあり笑顔がひきつったが、次第に子どもたちを玉入れキャラクターの世界へ引き込もうと歌のお姉さんを意識して笑顔と動作に親しみと楽しさが出るよう工夫した。自信がなくても堂々と子どもの前に立たなければ注目させたり楽しませたりできないことが身にしみてわかった。</p>
<p>3) 集団への関わりを経験する</p> <p>○2歳児は、子どもと遊ぶ時には目線や言葉がけに注意したが、クラス全体を見ながら遊ぶことはできず、遊びを展開する力はまだまだだと感じた。</p> <p>○実践は自分たちが考えていた通りにはならないと思っていたため、それらに対応するために、環境の再構成や手遊びなど子どもを繋ぎとめる方法を何通りも知っていなければならないと思った。私たちがしてほしいことをするのが保育ではなく、子どもたちの心を豊かにする、心に響く言葉がけ、遊びをすることが保育なのかなと思った。</p> <p>○5歳児クラスに入ったので、玉入れやじゃんけん列車などの集団遊びを通して、友達と楽しく順番やルールを守る行動ができており、子どもをまとめることができた。</p>

でも集団をまとめる際に必要な遊び環境の種類やルールを用意する必要性を感じたことが示されている。これは、今後身につけたい保育技術の1つになるであろう。

3. 教科間の連携

(1) 結果：教科間の連携に関する学生の感想を表6に示す。

(2) 考察：

今回、学生は保育に関する全ての科目が保育実践に必要であることを実感しており、保育実習指導Ⅰで実施した保育実践実習で持ち込む遊び環境を検討する際、保育原理で学んだ保育の基本を生かしながら保育内容総論に繋げ環境を提供する方法を理解し、発達心理学等で学んだ乳幼児の発達を基に基礎技能で工夫した遊び環境を組み合わせている。それらをまとめて保育内容総論や保育原理で計画的な環境構成をめざした立案に繋げていた実態が認められた。保育実習は、理論と実践の統合が目的であるが、まずは養成校における教科の理論を統合し、授業の一環とした短時間の実践に臨むことで養成校における理論と実践を統合する体験ができていたといえるであろう。

表6 教科間の連携に関する学生の感想

<p>○指導計画を考える時には、発達心理学で学んだ発達段階、保育内容で学んだ5領域、保育原理で学んだ保育をする上で大切なことを知っておく必要があると感じた。このように多くの授業がつながり、どの授業も大切なものだというのを改めて感じた。</p> <p>○保育実践実習では、保育原理で検討したようなけんかの場面の事例が見られたり、幼児体育で学んだバスタオルを使った遊びを取り入れたりして実践した。乳児保育や発達心理学の授業から1歳児の行動を予想することができ、保育内容総論では4,5歳児との実際の遊びから以上児との発達の違いがはっきり理解できた。日々学んでいることを実習で生かせ、全てのことが繋がっていると思った。</p> <p>○保育実践実習では、音楽で習った手遊びを導入で使用し、幼児体育で学んだ縄を使った遊びを取り入れた。発達心理学で子どものふしぎな行動から内面の成長を学ぶことができ、保育内容(健康)からそれぞれの年齢や発達段階の特徴をふまえた環境構成を学んだ。保育原理で学んだ子どもの最善の利益を考え、養護と教育の一体性を改めて感じた。このように授業で学んだことを実践で再確認できた。</p> <p>○保育実践実習では、保育原理では子どもへのまなざしと関わり方、保育内容では環境づくりと5領域について、乳児保育や発達心理学では子どもの育ちについて、音楽ではにこやかに楽しく歌を歌うこと、幼児体育では身体を使う動きについて学び、実践につながっていた。</p>

Ⅳ. まとめと今後の課題

本研究は、保育者養成課程の各教科で学ぶ保育の知識や技術が「環境を通して行う教育」にどのように繋がっているのか、実習の初段階である保育実習Ⅰに至るまでの4教科の授業内容において、「環境を通して行う教育」に関する授業の展開と教科間の連携について検討した。

まず、「環境を通して行う教育」について考察する。今回取り上げた4教科の授業の展開事例から、保育の基本である「環境を通して行う教育」の重要性が認識され、授業の根幹をなす内容として徹底されていたことが示された。今回、理論と実践の往還的關係を重視すべく保育実習指導Ⅰの保育実践実習において現場に環境を運んだが、計画構想時の環境と実際のギャップを実体験として感じることができた。その体験が、子どもの発達や興味・関心に基づく教育的価値を含んだ環境の吟味や子どもの主体性を尊重した保育者の配慮・援助など、今後は子どもの実態に即した実践力の向上が求められてくる。それらの課題を持ちながら、保育実習Ⅰの後に開講される教科につなげ、個々の学生の課題解決を図っていきたい。

次に、教科間の連関については、学生は保育に関する全ての科目が保育実践に必要であることを実感しており、1教科内での学びの積み上げと同様、教科間で保育の基本を連関することで多層的な学びに深まることが示された。このことから、保育の教科を担当する教員が、幼稚園教育要領や保育所保育指針に示されている保育の基本を踏まえて授業を展開することにより、共通した保育観の上にならざるを得ないそれぞれの教科からその専門性のみならず、人間性までもを修得することができるといえよう。保育士養成協議会（2006）は、養成校教員の課題の一つに教員組織に関する課題をあげ、教員集団が共同で教育内容をより適切なものとするようなシステムを構築する必要があると述べている。本学も今後は、保育実習Ⅰまでの学生の育ちをふまえ、その後に実施される保育実習Ⅱや幼稚園教育実習などと繋げていき、4年制の保育者養成校の特徴を生かした系統的な学びができるシラバスを組み立てる必要がある。さらに、教員が協同して適切な教育内容を連関するシステムを構築し、授業を展開していくことが望まれる。

最後に、このような教科間の連関を通して学んだ卒業生を追跡し、保育現場で実践している養成校での育ちを検証しつつ、卒後のリカレント教育にもつなげていきたい。

参考文献

- 1) 文部科学省（2008）：幼稚園教育要領解説，フレーベル館
- 2) 厚生労働省（2008）：保育所保育指針解説，フレーベル館
- 3) 塩野谷斉・木村歩美（2008）：子どもの育ちと環境 現場からの10の提言，ひとなる書房
- 4) 森上史朗・高杉自子・柴崎正行（1999）：幼稚園教育要領解説，フレーベル館
- 5) 社団法人全国保育士養成協議会（2008）：保育士養成のパラダイム転換Ⅲ－成長し続けるために養成校でおさえておきたいこと－，保育士養成資料集第48号
- 6) 無藤隆・柴崎正行（2009）：新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて，別冊発達29，ミネルヴァ書房
- 7) 全国保育士会（2009）：実践から学ぶ保育所保育指針，全国社会福祉協議会
- 8) 社団法人全国保育士養成協議会（2006）：保育士養成のパラダイム転換－新たな専門職像の視点から－，保育士養成資料集第44号

（2011年1月31日受理）